

レトロと題詠

河野裕子

この二、三年のことだろうか、歌会で「レトロ」ということが使われるようになったのは。近頃は、必ず誰かが「レトロっぽい」とか「あ、レトロ」だとか、ほとんど日常語化してしまったニュアンスで言っている。これは私が出ている歌会（塔の旧月歌会及び、塔と未来の合同歌会「荒神橋歌会」におけるひとつの傾向であろうかと考えていたが、どうもそうではないらしい。小池光の歌集『草の庭』が、全編これレトロ、という趣を見せて出版され、読者の心を掴んでいるのを、諸所で読むにつけ、レトロが今日の状況を強く反映しているという認識に誤りはないように思われる。

このことについては、毎日新聞の短歌時評（平成8・4・6）に「レトロへの共感覚」と題して書いたことがある。概略を抄出してみる。

は、短歌よりも俳句の方が即詠に向いているように思われる。

物象への瞬発的な把握力、あるいは即物的な角度の入り方、切り口の見せ方を示す文芸としての俳句は、短時間の集中力で作るのに向いているからである。

しかし、短歌は、この辺の事情が異なる。題詠のものの足りなさの一つの理由は、作者の感情、内面が出し切れないところにある。俳句は、即物で勝負できるが、短歌では情を叙べないことには一首の収まりが悪い。一首の中に「私」の情が見えないと、歌を作ったという満足感が得られないのである。

そういうマイナスポイントがあるにも拘らず、題詠があちこちの歌会で行われているのはどういうことなのだろう。もともと、「心の花」や「棧橋」では、何年も前から題詠をやっている。しかしそれは、近代短歌が否定した古典和歌の見直しとして、あるいは、作歌力をつける習練や、情性に陥りがちな作歌に別の趣向を持ち込むために、意識的に題詠を取りあげたのであって、昨今の題詠の自然発生的とも見える現象とは、ちょっと違うものを感じる。

今、私のまわりを眺め渡しても、求心的な

短歌のような短い詩型では多くのことを言うことはできない。作者にとっても、読者にとっても、共通の美意識・価値感をもつキーワードを使えば理解しやすい。

「レトロへの共感覚」の傾向は、大情況を歌にくい今日の表現の問題とも関わってくる。政治に変革の兆しがなく、正面から深刻に生き方を問う姿勢は恥ずかしいとされる時代的な風潮の中では、気分が優先されてくる。共感覚としての気分である。

この時評を書いて数か月たつが、基本的な所ではこの認識に変わりはない。

歌会に関連して、近頃もうひとつ気になることがある。この一年ほどの間に、幾つかの歌会に参加する機会があった。先に述べた二つの歌会のほかに、岩波書店「へるめす」主

催の「へるめす歌会」、NHK衛星テレビの「紅白対抗短歌会」とか「市民参加BS短歌大会」などであるが、「塔」の旧月歌会を除いて、これらの歌会ではいずれも題詠をやったということである。

それまでは、題詠とはほとんど無縁の場で歌を作ってきた私は、題詠といえは古典和歌の世界の出来事か、宮中歌会始のことくらいしか連想しなかった。

「へるめす歌会」には、四、五回参加しただろうか。ほとんど題詠ばかりだった。題詠といっても、あらかじめ題を与えられて作る場合と、その場で題を出されて作る即詠とがあるが、しんどのいは即詠である。これはどうも人によって得手不得手があるようで、巧い人はいつも巧く作る。

「へるめす歌会」では、即詠が何回かあつて、四十五分間に三首などというノルマを課せられたこともあった。この短時間の緊張と集中力のストレスは、相当こたえる。しかし、題詠向きの人にとっては、高度のゲーム感覚を発揮できる刺激的な場なのかもしれない。

古典和歌では、当意即妙に応え返す機智と才智を要求される社交や、恋の場面における即詠が主体であつたかもしれないが、現代で

生まじめさを歌会に求めるという雰囲気ではないことは確かだ。求心、集中ではなく、歌

会も結社も拡散の方向に向かっている。自分の歌が如何に読まれるか。そして、他人の歌をどう読むか、という読みの面白さの側

面に重心がかかった歌会。その読みは、多様であればあるほど面白い。生まじめさから解放された歌会には、今までになかった余裕を生み、その余裕が従来なら排除されがちであつたゲーム感覚をもとり込んでゆく。

題詠は、作者の生き方などから切り離され、イメージや言葉を先行させて、観念や機智に富んだ作品世界を展開してゆく。同一のテーマに、同時点で取り組み、そのテーマを共有しつつ、各自の切り口を様々な角度から示し得るのだ。作品の優秀を競うというより、気軽にその多様性を楽しんでみるという態度で臨むことも可能だろう。これらを認めつつ、題詠に対して私は、或る危惧を持たざるを得ない。

初めに、レトロへの共感覚について書いたが、それと同質のものを、題詠の中に感じるのである。

どのような時代においても、人々は、何らかの形で、共時的な共通感覚を求めたがるも

のである。

ファッションの流行もまたその一つであり、皆と同じような服を着、装身具を身につけ、化粧をすることで、時代の雰囲気、人々に繋がりたいと思ひ、繋がったと錯覚している。

レトロは、そういった時代の雰囲気的な、ある意味での、無意識の共感覚といった風潮の中で捉えるべきであろう。

これに対して、題詠は、時代の主題が見えにくく、自分からテーマを掴んでゆきにくい。今日的情況の中で、外から強制的に与えられる素材（大仰に言えばテーマ）であるとも考えられる。各自の個性のある切口を競い合いつつ、そこにひとつの共通性、共時性を確認し合う訳である。

無意識的なレトロの共感覚と、強制的な題詠は、ひとつの現象の裏表に見えてくる。桜なら桜という題詠をテーマとして歌いこなし、共有することで、何かを解消したと錯覚してしまうこともないとは言えない。

文芸が、もとより狂言綺語を含まなければ成り立たないことも、無意味な歌の良さも、重々承知して思うのだが、この掴みような不安は何なのだろう。